

一橋大学大学院社会学研究科研究科内センター

平成 22 年度活動報告書・平成 23 年度事業計画概要

センター	名称:一橋大学大学院社会学研究科 ジェンダー社会科学研究センター ウェブサイト: <a href="http://gender.soc.hit-u.ac.jp">http://gender.soc.hit-u.ac.jp</a> 学内活動拠点・同電話番号:マーキュリータワー 3617・042 (580) 9140	
報告者 (センター代表者)	氏名:木本喜美子(22 年度代表) 電子メール: <a href="mailto:k.kimoto@r.hit-u.ac.jp">k.kimoto@r.hit-u.ac.jp</a>	坂元ひろ子(23 年度代表) sakamoto.banyuan@gmail.com
報告書提出年月日	2011 年4月 13 日(訂正版)	

平成 22 年度活動報告

社会学研究科内センター規程「(別表)研究科内センター設立申請書作成時の留意点」の内容も踏まえ、以下の諸点につき項目別に具体的かつ明確に記述してください。記載は 10.5 ポイントで行い、必要に応じて欄の仕切りを上下に調整し、本報告書の1頁から5頁までに全体を収めてください。図表を含める場合も、この範囲に収めてください。

1. 組織構成員の異動と理由説明

2010 年度は、代表(木本喜美子)、教育部門総括 1 名(坂なつこ)、研究部門総括 2 名(伊藤るり、洪郁如)、総務・財務部門総括 1 名(佐藤文香)、共同推進者 7 名(井川ちとせ、小井土彰宏、尾崎正峰、貴堂嘉之、坂元ひろ子、多田治、中野聡)、学外共同推進者 3 名(ニューカッスル大学教授・ダイアン・リチャードソン、メルボルン大学教授・ヴェラ・マッキー、国際基督教大学教授・田中かず子)により活動を行った。  
 なお、異動等により、2名の共同推進者が組織構成員からはずれた(石井美保・足羽與志子)。

2. 当初事業計画に照らした活動実績

2.1 教育実績

- (1) GenEP 部門では、2007 年度より全学共通教育から学部基礎・発展、大学院教育にいたる全学的なジェンダー教育プログラムを提供し運営してきた。4 年目にあたる 2010 年度は、夏学期に基幹科目群 6 科目、連携科目群 24 科目、冬学期には基幹科目群 4 科目、連携科目群 27 科目の合計 61 科目を提供した。全体として、プログラムの科目群はより充実し、安定した運営を行うことができているといえる。また、今年度は大学教育開発センターの「授業アンケート」を利用する形態で、GenEP 提供科目の受講者全数(のべ 3,744 名)に対する調査を実施した。その分析結果によれば、これらの提供科目に対する受講生の満足度は総じて高く、より一層プログラムへの期待が高まっているといえる。
- (2) 「男女共同参画時代のキャリアデザイン」の授業記録より、『貴女を輝かせるキャリアデザイン』(広岡守穂・木本喜美子・西山昭彦編著、中央大学出版社)を刊行した(2010 年 7 月刊)。

2.2 研究実績

本センター構成員の個々の研究実績については割愛するが、2006～08 年度の先端課題研究7「日常実践/方法としてのジェンダー」の成果として『ジェンダーと社会—男性史・軍隊・セクシュアリティ』(木本喜美子・貴堂嘉之編、旬報社)を刊行した。本書は、執筆関係者により『国際ジェンダー学会誌』(佐藤文香、2010 年第 8 号)やウェブサイト WAN (Women's Action Network) (貴堂嘉之、2010 年 8 月 27 日、<http://wan.or.jp/>)において紹介されたほか、『静岡県近代史研究会 会報』(平井和子、2011 年 1 月 10 日号)でもとりあげられた。  
 また、7 月に開催した国際シンポジウムの刊行記念書籍である『モダンガールと植民地的近代—東アジアにおける帝国・資本・ジェンダー』(タニ・バーロウ/伊藤るり/坂元ひろ子編、岩波書店)は、『ジェンダー史学会』(小浜正子、2010 年第 6 号)、『ジェンダー研究』(大橋史恵、2011 年第 14 号)、『中国女性史研究』(上村陽子、2011 年第 20 号)、『ふえみん』(2010 年 8 月 15 日号)、『図書新聞』(2010 年 7 月 23 日号)、『日本経済新聞』(2010 年 6 月 30 日夕刊)等に書評が掲載された。

### 2.3 外部機関等との連携実績

- (1) 外部講師を招聘し、下記の講演会（公開レクチャー・シリーズ）を3つ開催した。毎回50名を越える参加者を得ている。
- ① 公開レクチャー・シリーズ(第11回):2010年6月18日  
ジャクリン・アンドール(バース大学ヨーロッパ研究学部上級講師、一橋大学外国人客員研究員)「イタリアのフェミニズム —『家事労働に賃金を』から『プレカリアート』へ」  
司会:伊藤るり
  - ② 公開レクチャー・シリーズ(第12回):2010年10月20日  
游鑑明(台湾中央研究院近代史研究所研究員・一橋大学外国人客員研究員)「広告とアートからみた近代中国の女子スポーツ」  
司会:洪郁如
  - ③ 公開レクチャー・シリーズ(第13回):2011年2月4日  
村瀬幸浩(一橋大学講師)「性と愛をめぐる不安と学び —大学生たちの今」  
司会:尾崎正峰
- (2) 外部講師を招聘し、下記の公開ワークショップを2つ開催した。前者は留学を予定・計画している本学大学院生に、後者は大学における育児サポート問題に関心を寄せる学内外の人びとに情報を提供・発信し、議論し合う貴重な場となった。
- ① 公開ワークショップ:2010年7月2日  
根本宮美子(ウェスタン・ケンタッキー大学社会学部准教授)「ジェンダー領域で学位論文を書く —『Racing Romance』を語る」  
司会:木本喜美子
  - ② 公開ワークショップ:2011年1月29日  
「大学における育児サポート —新しい一橋大学に向けて」  
高橋道子(東京学芸大学教育学部教授)  
末松和子(東北大学大学院経済学研究科国際交流支援室准教授)  
金崎英美子(宇都宮大学名誉教授)  
五十嵐由利子(新潟大学教育学部教授)  
司会:佐藤文香
- (3) 外部講師を招聘し、他機関と連携をとりながら、下記の国際シンポジウムを2つ開催した。
- ① 国際シンポジウム:2010年7月17日  
「モダンガールと植民地的近代 —東アジアにおける資本・帝国・ジェンダー」  
司会:第一部 伊藤るり、第二部 坂元ひろ子  
協賛:ライス大学チャオ・アジア研究センター、成蹊大学アジア太平洋センター  
後援:お茶の水女子大学ジェンダー研究センター
  - ② 国際シンポジウム:  
「東アジアの越境・ジェンダー・民衆 —ドキュメンタリーと映画から見た日台関係の社会史」  
開会あいさつ 木本喜美子・薛化元(財団法人自由思想学術基金会理事長、国立政治大学教授)  
閉会あいさつ 邱坤良(国立台北芸術大学教授)・洪郁如  
共催:台湾 財団法人自由思想学術基金会  
後援:台湾 行政院文化建設委員会
- (4) 2009年11月に発足した多摩地区ジェンダー教育ネットワーク(呼びかけ人:田中かず子・加藤恵津子(国際基督教大学)、木本喜美子)は、4回の会合を積み重ねた。うち、7月1日の会合においては、木本喜美子より「一橋大学におけるジェンダー教育プログラム・立ち上げから現在まで」の報告を行った。

## 2.4 社会貢献実績

- (1)公開レクチャー・シリーズおよび公開ワークショップ、国際シンポジウムは、毎回、学会や市民ネットワークを通じた広報を行っており、学外からの研究者および市民にも開かれたイベントとして広く社会貢献に役立っている。毎回のレクチャーには常に 50 名、国際シンポジウムや公開ワークショップには時に 100 名にもものぼる参加者を集めており、本センターの開催するイベントに対し学内外から高い期待が寄せられている。
- (2)GenEP 部門が提供しているジェンダー教育プログラムでは、一つの柱として労働・経営・キャリアデザインの系列を重視しているが、とくに共通教育科目「男女共同参画時代のキャリアデザイン」では講師に本学卒業生が登壇することも多く、卒業生や如水会との連携・協力関係の構築に大きく寄与している。本講義に登壇した講師を招いての報告会は今年度で3回目を迎え、現代の学生像、大学教育のあり方等について、卒業生、社会人・企業人と幅広く意見交換を行う貴重な場となっている。

## 2.5 外部資金獲得実績

- (1)本センターの GenEP 教育部門を実施主体とした「一橋大学におけるジェンダー教育プログラム (GenEP) の高度化推進プログラム」プロジェクトは、平成 22 年度大学戦略経費「教育研究改革・改善プロジェクト経費」の事業として採択され、150 万円を得た。
- (2)公開レクチャー・シリーズの第 11 回講演および 7 月の国際シンポジウムには、本学の国際セミナー費を得た。また、11 月の国際シンポジウムには台湾行政院文化建設委員会より助成を受けた。
- (3)本センターの運営にあたっては、東京ガス西山経営研究所所長の西山昭彦氏や「男女共同参画時代のキャリアデザイン」、「労働とジェンダー」に登壇される講師の方々と連携しつつ、企業の男女共同参画委員会、ダイバーシティ委員会等の関連部署や労働組合等から適宜寄付金を得られるよう働きかけている。また、昨年度の「男女共同参画時代のキャリアデザイン」の授業記録より刊行した『人生のキャリアデザイン術』（西山昭彦編、KK ロングセラーズ）より、その印税を寄付としてうけた。

## 3. 設立目的に照らした平成 22 年度活動実績の自己評価

本センターは、(1)ジェンダー研究と社会科学を融合させた学際的な研究領域を創出し、ジェンダー視点を導入した新しい先端的社会科学の潮流を生み出すことをめざすとともに、(2)こうした研究を基礎とした新たなジェンダー教育の確立とその実践をめざして設立された。

この設立目的に照らして平成 22 年度活動実績を評価するならば、まず(1)の研究面については、先端課題研究7という共同研究の成果を出版物として刊行することができた。ここには昨年度までのレクチャー・シリーズによる成果も盛り込まれており、センター活動の活性化のなかで生み出された成果物であるといえる。また公開レクチャー・シリーズの回を重ね、学外より先端的な研究者を招聘することにより、新しい学際的なジェンダー研究にむけて刺激的な討論の場を創出することができた。また、各イベントにおいては懇親会の開催等を通じて、招聘講師と大学院生との交流の場をつくることにつとめ、センターの活動に対する院生の能動的な参加のルートを形成することができた。

国内外を問わず他機関との交流が進む中で、本センターは日本の女性学・ジェンダー研究の重要拠点の一つとして数え上げられるようになってきており、大きな社会的位置づけを与えられつつある。今後、この線にそったかたちで先端的な研究者および高度専門職業人の養成に資するよう、努力を重ねていくことが各方面から期待されている。

また(2)の教育面に関しては、2011 年度は GenEP エントリー科目として53科目をオーガナイズすることができ、充実した教育プログラムを提供することができている。本研究科を中心とした本学教員スタッフの理解と協力が、その基盤になっている。

#### 4. 平成 23 年度事業計画概要

##### 【研究交流部門】

レクチャー・シリーズやワークショップにおいて先端的な研究者を招聘し、充実したイベントの開催につとめたい。招聘候補者として次の方々が推薦されており、新年度の開始以降、順次企画を立てていく予定である。エレナ・スミコ・ヒラタ(フランス国立科学研究センター・研究部長、「ジェンダー、労働、移動」研究チーム)、キャサリン・セニザ・チョイ(カリフォルニア大学バークレー校)、包英華(本学外国人客員研究員、内蒙古大学)、北原恵(大阪大学)、新城郁夫(琉球大学)、石黒久仁子(東京大学)、青山薫(神戸大学)等

##### 【GenEP 部門】

夏学期、冬学期の終了時に、GenEP 科目の受講生アンケートを実施し、全学共通教育、学部教育、大学院教育における教育プログラムの改善・充実に役立てるようつとめる。またレクチャー・シリーズとも連携し、本学のスタッフおよび学生・院生が、ジェンダー教育について考える機会を提供する。

以上のほか、引き続きジェンダー教育プログラムを展開している国内外の大学や諸機関とのさらなる連携をはかり、また適宜、視察やシンポジウム等イベントへの参加を行うことで情報収集につとめる。

#### 5. 平成 23 年度における組織改廃計画

本センター規約(2010年4月1日施行)に基づき、2011年1月14日の運営協議会において、2011年度の代表および各部門総括の選出を行い、代表として坂元ひろ子、教育部門総括として洪郁如、研究部門総括として伊藤るり、佐藤文香、財務・総務部門総括として貴堂嘉之が選出された。

#### 6. その他特記事項(研究科への要望等は本欄には書かず、別途研究科長にご相談ください。)

特になし。